

2021年11月21日
都城城南教会主日礼拝
(九州連合長老会講壇交換)
牧師 乾元美 (宮崎中部教会)

申命記 10 : 12~22

マタイによる福音書 22 : 34~40

「まず愛したのは？」

<二つの掟>

わたしたち、イエスさまの救いを信じる信仰者に、与えられている掟が二つあります。

一つは、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」もう一つは、「隣人を自分のように愛しなさい。」という掟です。

これは、イエスさまが最も重要な掟として教えて下さったものです。

この聖句が、今年度の都城城南教会の年間主題だとお聞きしています。このことを覚えて一年を歩んで行く。とても大切なことです。でもこれは、わたしたちが生涯をかけて、ずっと覚え続けなければならない、最も重要な聖句の一つと言ってもよいでしょう。

この二つの掟を聞いた時に、みなさんはまず、どう思われたでしょうか。よし、そうできるように頑張ろう。努力していこう。そう前向きに思えたでしょうか。

いやむしろ、これはとても難しいことだ。自分には中々出来ないことだ、と唸ってしまった方はありませんか。あるいは、まったくこれらが守れていない自分の現実が突き付けられる思いがする。罪を暴かれている気がする。そう感じられた方もおられるかも知れません。

この第一の掟は、旧約聖書の申命記 6 章 5 節、第二の掟は、レビ記 19 章 18 節に記されている御言葉です。この二つをイエスさまが守るべき掟だと言われたのは、ファリサイ派の律法の専門家が、イエスさまに質問をしたからです。

36 節「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」

これに対して、イエスさまはこの二つの掟をお語りになり、今日の最後の 40 節のところで、こう仰ったのです。「律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」

「律法全体と預言者」というのは、つまり旧約聖書全体のことです。

旧約聖書はとても膨大な書物です。しかし、このすべてが、神さまを愛すること、隣人を自分のように愛すること、という二つの掟にかかっている、というのです。

「二つの掟に基づいている」と訳されている言葉は、新しい聖書協会共同訳という訳では、「二つの掟に、かかっている」となっています。英語なら hang。ぶら下げる。この二つの掟に、律法だけでなく、旧約聖書全部がぶらさがっている。つまり、この二つの掟がなければ、全部が下に落ちてバラバラになってしまう。それほど重要な、肝となる掟なのです。

<律法>

そもそも、旧約聖書の律法、掟は、神さまがイスラエルの民を選ばれ、ご自分の民とされたゆえに、その民が、神の民としてふさわしく歩むことが出来るように、守るべきものとして与えられたものでした。

今日出て来る「ファリサイ派」と呼ばれる人々は、特にこの律法を厳格に守る人々のことです。彼らは、神の民としてふさわしく歩むために、本当に熱心に、ストイックに、律法を隅から隅まで守ってきました。そのこと自体は、とても大切なことです。

しかし、それはいつしか熱心さのあまり、律法を守ることそのものが重要であるかのようになっていました。ファリサイ派の人々は、自分たちは律法を完璧に守っている清い者として、他の人々や、罪人と思われる人々や、異邦人を、徹底して分け隔てしました。

ファリサイ派とは、日本語で言えば「分離派」という意味です。自分たちを罪人たちから分離する。清い者として分ける。それが、ファリサイ派なのです。

ところがイエスさまという方は、どうもこの律法を厳格に守ろうとなさらないのです。断食はしないわ、罪人と食事するわ、安息日に労働するわ。何より、神の権威で教えたり、様々な業を行なったりする。律法の専門家からしたらイエスさまは、ちょっと目に余るどころではなく、大変迷惑だし腹が立つ。何様のつもりだと言いたくなる。そんな存在でした。

それで、このファリサイ派の律法の専門家は、35 節に「イエスを試そうとして尋ねた」とあります。律法のことについて尋ねたのは、イエスさまを試すためだったのです。

このイエスという者は、律法のことを本当に分かっているのか。自分は専門家だから、完璧に答えられるし、律法を守っていることに関しても自信がある。だから、イエスという人物がどれほどのものか、自分が評価してやろう。上手く答えられなければ裁いてやろう。

そんな敵意に満ちた思いで、律法を、イエスさまを貶めるための質問に利用したのです。

そこに、あのイエスさまのお答えです。『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』

このイエスさまのお答えは、ここで初めてイエスさまが言われたことではなくて、律法の専門家の間では知られている答えだったといいます。しかしこれは、単にイエスさまがちゃんと正解をお答えになった、ということではないでしょう。

むしろイエスさまは、ここで律法の専門家に鋭く問い返されたのではないのでしょうか。

律法は、神を愛するため、そして隣人を自分のように愛するためにある。人が、その神の御心に従って歩むためにある。この二つの掟に立つこと。そこに、すべてが掛かっている。その質問をしたあなたは、律法の専門家であり、律法を正しく守っていると自信を持ってい

るが、本当に、この最も重要な掟に従っているのか。ここを外してしまつては、全部が地に落ちてしまう、その要である二つの掟を、あなたは本当に知っており、それを守って生きているのか。すべてを尽くして、神を愛しているか。隣人を、自分のように愛しているか。

…この二つの掟を守っていないなら、他の律法をどれだけ完璧に守っていても、食事の前に手を洗っていても、罪人と触れないようにしていても、安息日にちゃんと安息していても、それは何もかも下に落っこちてしまっているのです。

<惨めな現実>

さて、今日の御言葉はここまでですが、わたしたちもまた、二つの掟を聞かされた時、この最も重要な掟に、神さまがわたしたちに望んでおられることに、表面的ではなくて、まことに心から生き抜いているか。それを問われる思いがします。

そして、その時にわたしたちは、掟に、律法に、神さまの御心に、心から従うことが出来ない自分の罪の姿を、否応なしに突き付けられるのではないのでしょうか。

わたしたちは、掟を自分でちゃんと守れている、神さまの御心に従えている、と思っているならば、その内だんだん傲慢になっていきます。そうすると、いつしか自分のことを誇るようになってきたり。あるいは、従えていない他人のことが気になって、指摘しようとしたり、裁き始めたりするのです。

また、守れない、わたしは出来ない、とっていると、だんだん劣等感を覚えたり、どうせ自分には出来ない、と卑屈になってしまったりします。

掟や律法は、神さまの御前で、わたしたちが神さまの御心に従えない現実を明るみに出し、自分の罪の姿を、弱さを、はっきりと自覚させる。そんな側面が、確かにあるのです。

それで、もしここでこの話が終わりだったら、わたしたちは、守るに守れない掟を与えられた中で、罪に打ちひしがれながら、どうにか自分を打ち叩いて、叱咤激励して、歯を食いしばって、掟を守る者にならなければならない、ということになるかも知れません。

しかしこの二つの掟は、他でもない、わたしたちの救いを成し遂げられた、神の御子イエスさまが語って下さった、ということによって、まったく新しい光に照らし出されていくのです。

<イエスさまのもとで>

イエスさまは、わたしたちに出来ないことをせよ、と言われたわけではありません。

あなたたちは、この掟に従う者となることが出来る。このように生きることが出来る。その指針として、約束として、希望として、今やこの掟は与えられているのです。

確かに、わたしたちは自分の力や、努力や、頑張りでは、決してこの二つの掟を守り通すことは出来ません。しかし、わたしたちを、この掟を守る者とならせて下さるのは、他でもない、このことを語られたイエスさまご自身なのです。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」「隣人を自分のように愛しなさい。」そう語られたイエスさまは、ご自身において、まず神さまこそが、わたしたちのことを、心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、愛し抜いて下さったことを示して下さいました。

神の御子イエスさまは、神さまのわたしたちへの愛を示すために、この世に来て下さったお方です。そしてそれは、イエスさまの十字架の死に、最もはっきりと表されています。

イエスさまが、律法の専門家とこのやり取りをなさったのは、すでに救い主としての御業を成し遂げるために、エルサレムに入られてからのことです。つまり、このやり取りから一週間もしないうちに、イエスさまは裏切られ、裁判を受け、苦しみを受けて、十字架に架かって死なれるのです。

それは、すべての人の罪を赦すため。神さまの御心に従うことが出来ない、すべての罪人を赦すためです。神さまの思いから離れ、自分勝手に歩んでいるすべての人間の罪を、ご自分が一身に背負い、ご自分の命を代価として支払って、わたしたちの罪を償うためです。

イエスさまの十字架は、このイエスさまを試した律法の専門家のためでもありました。ご自分を裏切った弟子たちのためでもありました。十字架につけると叫んだすべての群衆のためでもありました。そして、神さまの御心から離れて歩んでいる、ここにいるわたしたち、一人一人のためでもあったのです。

父なる神さまは、そうして、ご自分の愛する御子の命を与えるほどに、わたしたちを愛して下さいました。わたしたちを生かし、立ち帰らせ、共に生きていと望んで下さいました。

そして、この父なる神さまに遣わされた御子イエスさまは、まさにご自分こそが、わたしたちの隣人となって下さり、ご自分の命を与えて、すべてを与えて、わたしたちを愛し抜き、救い出し、生かして下さいました。

「隣人を自分のように愛しなさい」、とイエスさまが答えられた時。今日のマタイの箇所と同じ記事が書かれている、ルカによる福音書 10 章では、律法の専門家が続けてこう質問をします。「では、わたしの隣人とはだれですか。」これに対してイエスさまは、善いサマリア人のたとえを語られました。

追いはぎに襲われて、行き倒れているユダヤ人がいたとき、彼と同じユダヤ人で、しかも指導者的立場である者たちは、見て見ぬふりをして通り過ぎて行きました。自分の安全を守り、面倒に巻き込まれないため。また、自分が汚れないようにするためです。

しかし、そこを通りかかったサマリア人が、このユダヤ人を助け、宿にお金を払って、彼を介抱するように頼んでくれました。サマリア人とは、ユダヤ人と激しく敵対する民族です。しかし、彼こそが、行き倒れたユダヤ人の隣人に「なった」のです。

わたしの隣人とは誰か。誰を愛すればいいか。「隣人を愛する」とは、そうやって、自分

で人を選んで、愛したい人を愛することではありません。イエスさまはむしろ、弱い者、小さい者、あるいはそれが敵対する者だとしても、あなた自らがその人のところへ行って、その人の隣人に「なりなさい」、と言われたのです。

イエスさまは、「わたしの隣人とはだれですか」と質問した律法の専門家に、「行って、あなたも同じようにしなさい」と言われました。

そして、ここでわたしたちが思い起こすべきことは、罪に倒れているわたしたちに近付き、神さまに敵対するわたしたちを介抱し、滅びの中から救い出して下さったのは、隣人となつて下さったのは、他でもない、イエスさまご自身だったということです。

先程のサマリア人は、宿代を払って、後は宿屋の主人に、この行き倒れたユダヤ人を任せていきました。人が出来る範囲はそこまでです。それで良いのです。

しかしイエスさまは、わたしたちのために、ご自分の命を代価として支払われました。そして、わたしたちを罪の中から完全に救い出して下さった。そして復活し、その新しい命にわたしたちを生かして下さいました。

まず、ご自分のすべてを尽くして、命を与えてまで、神さまに敵対するわたしたちを愛し抜いて下さったのは、イエスさまご自身だったのです。神さまが、イエスさまが、わたしたちのことを、心を尽くして、精神を尽くして、思いを尽くして、愛して下さいました。

この事実が、まずわたしたちに与えられているのです。

イエスさまによって、わたしたちは神さまに対して犯した罪を赦され、神さまの子どもとして受け入れられました。『あなたの神である主』を愛しなさい」とあるように、神さまを、「わたしの神である主」「わたしの神」と呼べる者として下さいました。

だから、イエスさまは言われるのです。「これほどの神さまの愛に生かされているあなたからこそ、この神さまの愛を受け止め、それにお応えして、神さまに心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、あなたの存在のすべてを尽くして、あなたの神さまを愛しなさい。」

そして、わたしたちは、自分がそれほど深く神さまに愛されていると知るからこそ、自分のことを、神さまが愛して下さいた者として愛することが出来るし、また隣人も、自分と同じように神さまの愛を受けている者として、大切にしていけることが出来るのです。

神さまを愛することと、自分を愛することと、隣人を愛することの、すべての根底には、イエスさまの十字架と復活によって示された、神さまの愛があるのです。

<道しるべ>

だからまず、第一の掟は、愛を与えて下さった神さまを愛することなのです。まず、神さまの愛を知るののであれば、そして、それを受け止めるのであれば、自分のことを愛し、隣人のことを愛するという、第二の掟に行くことは出来ません。

しかし、第二の掟も、第一の掟と同じように重要です。つまり、神さまは愛しているけど、自分を愛せない、隣人を愛さない、ということはありません。

神さまの愛をたしかに受け止めて、神さまを愛する歩みをしていくならば、わたしたちは神さまが愛しておられる自分のことも、隣人のことも、大切にするとされていくのです。日々の生活の中で、家庭で、職場で、学校で、地域の中で、また世の中に対して、隣人を自分のように愛する歩みへと、促されていくはずなのです。すぐにそのようには出来なくても、そう生きることが出来るように、祈り求める者とされていくのです。

確かに掟には、第一、第二と順序があります。しかし、これはどちらも重要で、表裏一体となっていることなのです。

そしてこれらの掟は、もはや、自分を打ち叩いて守らなければならない、苦痛を堪えて従わなければならない、窮屈な規則などではありません。イエスさまが、わたしたちを罪から解放して下さった今や、掟や律法は、もはや罪を明らかにし、「しなければならないことだ！」と言って、わたしたちが眉をしかめながら、苦しみを覚えながら、守るべきものではなくなったのです。

この二つの掟は、神さまの愛を知らされた者にとっては。イエスさまの命がけの愛を受け取った者にとっては。心からの感謝と喜びを持って、この愛にお応えし、神さまに喜ばれる者として歩んで行きたいと願う時の、「道しるべ」となったのです。

確かに今もなお、わたしたちは罪を犯してしまいます。神さまの愛を忘れてたり、神さまを疑ったり、自分の力に頼ったりします。隣人を愛すること、小さい者の友となること、敵を愛することなど、とてつもなく困難です。

しかし、わたしたちはそんな自分の罪を見つめるのではなく、そこに罪の赦しを与えて下さったイエスさまをこそ、仰ぎ見ることが出来るのです。そのゆえに、わたしたちは顔を上げて、イエスさまの赦しの中で、支えられながら、導かれながら、神さまに喜ばれる道を求めて歩んでいくことが出来るのです。

神さまを愛し、神さまに心からのまことの礼拝をささげていく。神さまに愛されている自分の命や日々を、心から愛おしみ、大切にしていく。同じように、神さまに愛されている隣人を重んじて、共に神さまの恵みに生きていくことが出来るように、心や、思いや、なせる業を尽くしていく。

神さまに愛された群れであるわたしたちが、神さまの愛を溢れるほどに受けて、この愛に押し出されて、この感謝と喜びの道を、歩んで行くことが出来ますように。

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたが、大きな愛を持って、わたしたちを深く深く愛して下さい、御子イエスさまをお遣わし下さったこと。イエスさまが、ご自分の命を尽くして、わたしたちを愛い抜いて下さったこと。この神さまの愛によって、今わたしたちが生かされていることを、心から感謝いたします。

そしてイエスさまが、ご自分の救いのもとで、ご自分の愛のもとで、感謝と喜びに生きるための二つの掟を、わたしたちに示して下さいたことを感謝いたします。

どうかわたしたちが、イエスさまに支えられてこの恵みにお応えし、喜びをもって神さまを愛し、隣人を自分のように愛する歩みをなしていくことが出来ますよう導いて下さい。

そしてこの群れが、あなたの愛を現す群れとして、あなたの愛に生きる群れとして、この世の人々の隣人となり、喜びに溢れて歩いていくことが出来ますように、聖霊によって導いて下さい。

本日は、九州連合長老会の交わりの中で、都城城南教会と宮崎中部教会で講壇交換を行なうことが出来たことを、心から感謝いたします。都城城南教会の歩みの上に、ますます主の愛と恵みが増し加えられ、よき交わりが深められ、伝道の業がますます祝されますように。

また、この宮崎の地に共に建てられた教会として、わたしたちが共に祈り合いつつ、支え合いつつ、あなたの御許にこの地の人々を一人でも多くお招きすることが出来ますように。

感謝して、主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン